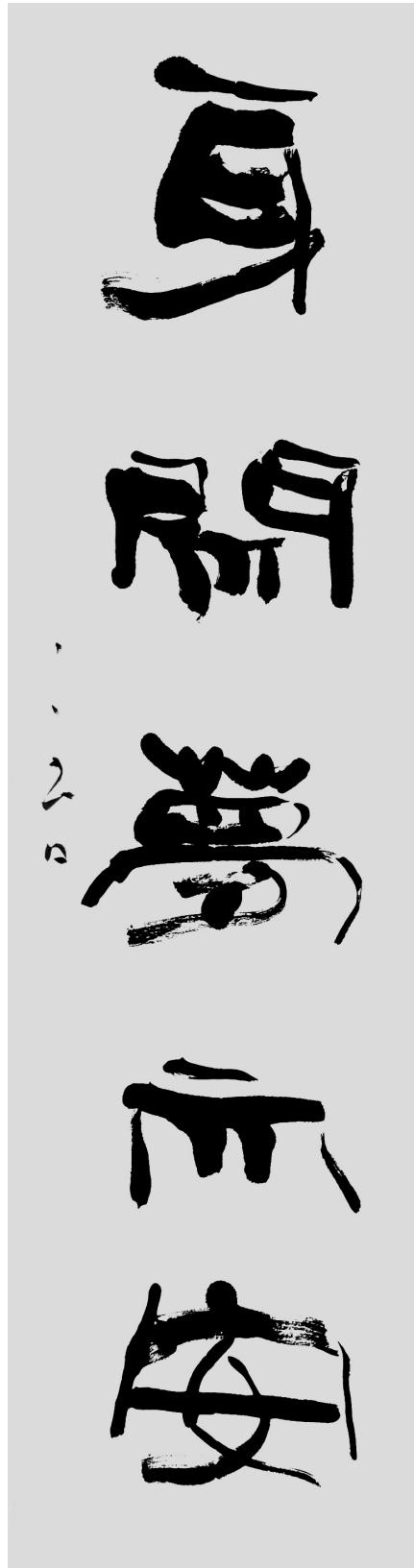


2月25日正午必着

明石春浦先生書



明石幸子書



降りそむる 今朝だに人の 待たれつる み山の里の 雪の夕暮 (寂蓮)

2月25日正午必着

新月細如レ眉 春雲長似レ帶  
幽禽堪夜寒宿 在梅花外 (廣瀬青村)

日與世情違  
地僻人難到 溪深鳥自飛

羨君無外事  
地僻人難到

野飯藥苗肥  
儒衣荷葉老

若問湖邊意  
而今憶共歸

暮れおそく 庭のうぐひす 聲止めば ゆたかに雨の 降り出でにけり

(吉野 秀雄)

寄邢逸人

(鄭常)

羨君が外事無く 日に世情と違ふことを

地僻にして 人到り難く 溪深くして 鳥自ら飛ぶ

野飯藥苗肥 やくびょうこ  
儒衣荷葉老 じゆい かようお  
若も湖辺の意を問わば 而今 共に帰らんことを憶う

一花開天下春 (虛堂錄)

一花は梅花。梅が咲きそめて、どこもかしこも春とはなつた。

## 条幅部創作課題

四種の詩文から一種を選択して出品のこと。

池魚自樂誰知我。 林鳥相忘不邇人 池魚は自ら樂み、林中の鳥は人を避けずに啼いている。

池魚自樂誰知我。 林鳥相忘不邇人 池魚は自ら樂み、林中の鳥は人を避けずに啼いている。

森戸春濤書

半紙部規定課題A

2月25日正午必着



※作品には必ず落款を入れてください。

明石春浦先生書

※課題A(楷書)と課題B(四体の中より一書体選択)の二点を出品のこと。

## 半紙部規定課題B

2月25日正午必着

行書

隸書

明石春浦先生書

題 李疑幽居

賈島

草書

行草書

しずかなわびすまい、隣り合う家とてなく 草むす径は、荒れるにまかせた庭へとみちびかれる  
鳥は池の中の木立にやどり 僧がひとり、月の光の下に門をたたく（ひそやかなその音）  
橋を過ぎてなおも存する野のけはい 山中の雲のわく石を移し来てすえてあるのが目に入る  
しばらく他処に行つていきましたが、またここにもどつて来ましたが 風雅のちぎり、決して言に違うことはありません

野過橋分野色

野過橋分野色

野過橋分野色

野過橋分野色

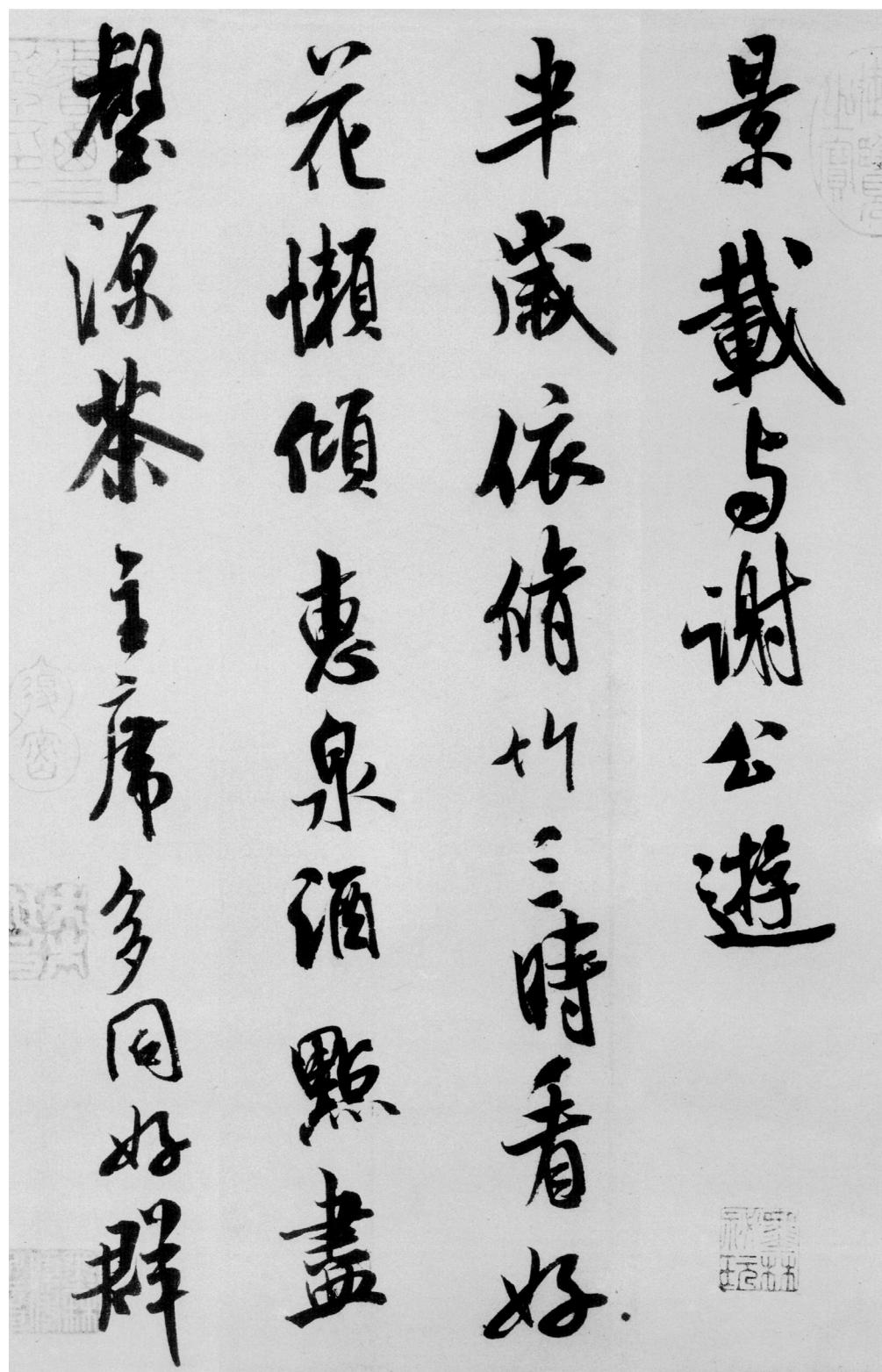
閑居少鄰並  
草徑入荒園  
鳥宿池中樹  
僧敲月下門  
過橋分野色  
移石動雲根  
暫去還來此  
幽期不負言

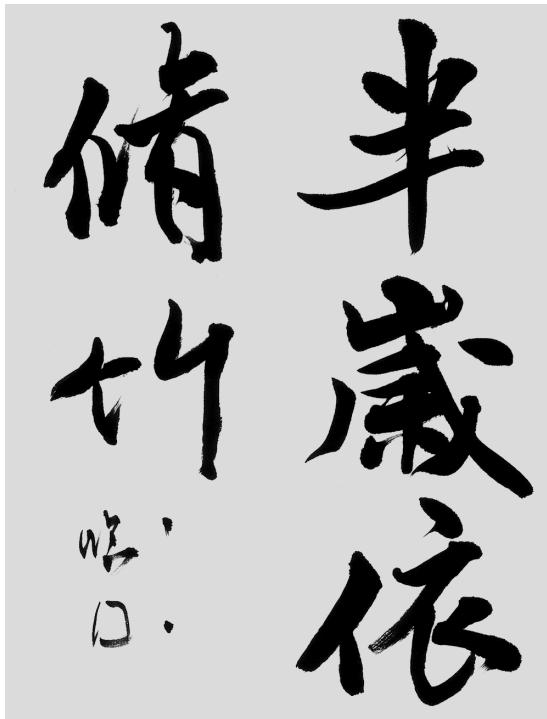
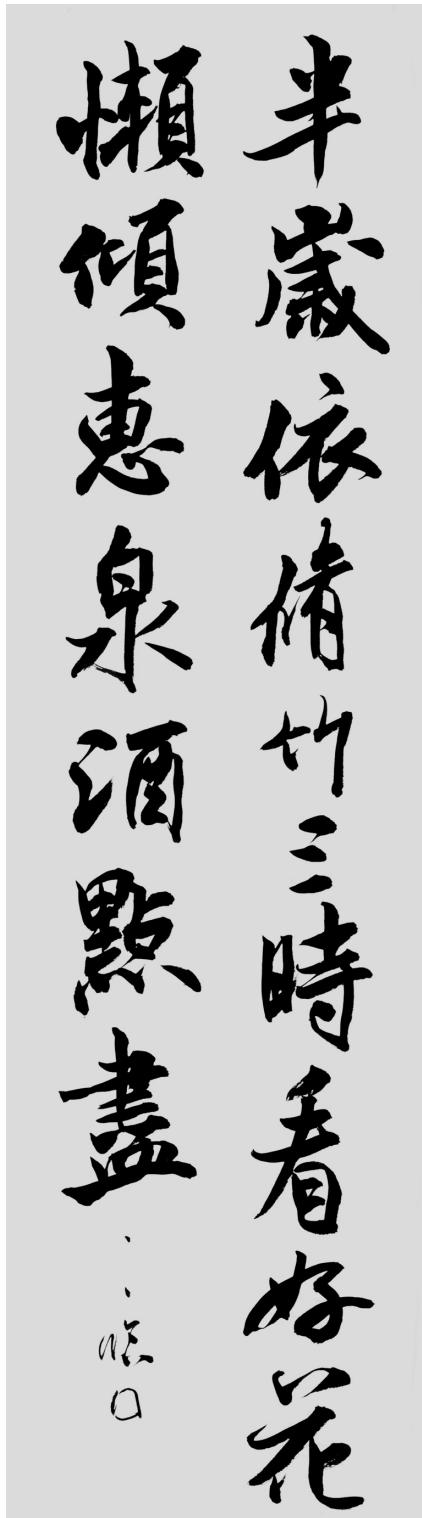
李疑が幽居に題す

賈島

僧は敲く 月下の門  
橋を過ぎて 野色を分ち  
石を移して 雲根を動かす  
暫らく去りて 還た此に来る  
幽期 言に負かず

(出典) 朝日新聞社刊  
『三体詩』下より





宋  
米芾・苕溪詩卷

米芾（一〇五一—一〇七）、原名は黻、四十一歳以後に芾の字を書いた。字は元章、鹿門居士、襄陽漫士と号した。書については、蘇軾、黃庭堅とともに宋の三大家と呼ばれている。この三人は十五年の年齢差はあったものの、互いに親友として一生交際を続けた。三人の書はほとんど趣を一にして友である。それに新しく独自の書法を見いだそうと古人の書法を研究し、一生懸命に努力を試みたが、時代の要求に応えて、自由な個性、人間的な精神を表現するにふさわしい書風を創始するという共通の目標によつて、このようになつたと推測されている。

米芾は、天資高邁で、ひととなり狂放。世の常識には与しない性格であったといわれる。書を書くだけでなく、書画を集め、鑑賞し審定し、書画についての多くの記録を残した。それ故書画の研究という面での開拓者であつたともいえる。画においても優れた才を發揮し、米法山水の創始者でもあつた。

この苕溪詩巻は米芾が、當時湖州の知州をしていた林希の招きでその任地を訪れた際に友人達に呈した詩、五言律詩六首を書き連ねている。その書は一点一画、起筆の入筆から收筆まで油断がなくどの瞬間にも油斷がない。この用意周到な技法こそが最大の魅力である。この遊中に書いた蜀素帖とともに壮年期における代表作である。

現在北京の故宮博物院に蔵されている。

(春龍)

2月25日正午必着

教 育 部 毛 筆



精

進

中学一年

雨宮春聲先生書



閑

靜

中学二三年

菅井松雲先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



前

後

小学五年

榎戸 春龍先生書



模

型

小学六年

藤井 良泰先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

2月25日正午必着



こ  
小

ゆき  
雪

小学三年



そう  
早

ちょう  
朝

小学四年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



わ

た

小学一年・幼年

明石幸子書



しょ

ご

小学二年

森戸春濤書

2月25日正午必着

## 教育部 硬筆

## ペン字部

雪がふつて庭の石が  
白く光つてしまいだ

先の先まで見とおす  
ことを千里眼という

気持ちを落ち着かせて  
静かな心で考えてみる

未来の期待をひの内に  
持つ人はいつも若々しい

鐘寒きみ寺の庭の朝霜に白玉椿こぼれてありけり(太田水穂)

小学五年

小学六年

中 学

一般(級位)

一般(段位)

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。  
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

えじ  
をぶん  
かの  
きま  
ます

幼年

んさ  
しか  
ゆ上  
うが  
をさ  
するれ

小学一年

か黃  
ら金  
みは  
つど  
かう  
つく  
たつ

小学二年

名小  
ま筆  
えを  
もつ  
かか  
くつ  
て

小学三年

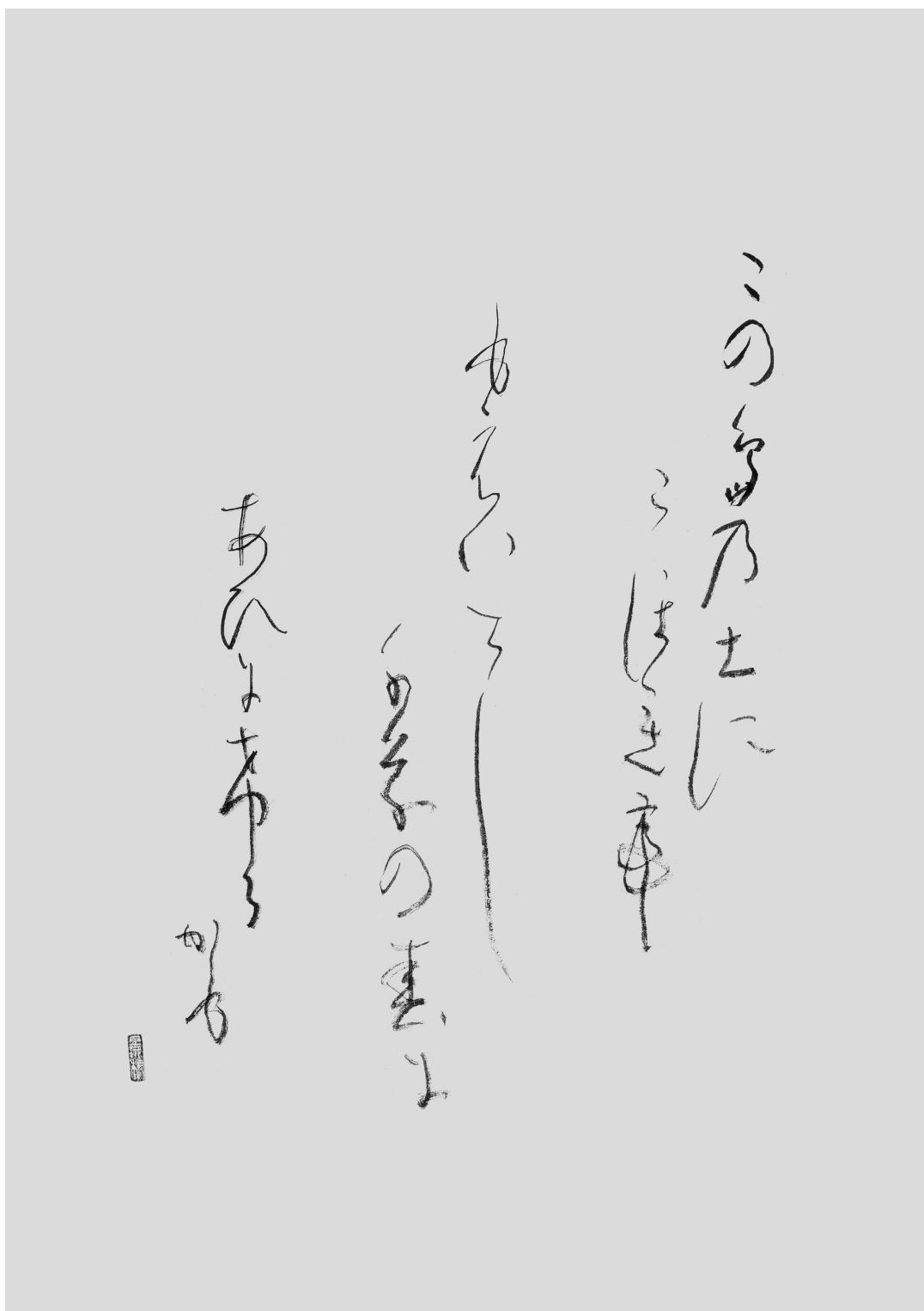
家の  
そく  
みんなで  
分の豆  
まきをし  
た

小学四年

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。  
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

## 半紙部かな参考

2月25日正午必着



この島の土にこぼれてもえいだし千草の春にあひにけるかも  
乃連帝爾希毛（太田水穂）

若本景楓先生書